

エーゲ海の風

星座神話の向こうに広がる古代ギリシアの天文学

季節の星座たちとそれらを彩る星座神話の世界はなじみ深いものだが、それらが古代世界においてどのようにして誕生し伝えられ、今の形になったのかまではあまり知られていない。プトレマイオスの星座たちと神話が生まれた背景をたどりながら、古代ギリシア及びその周辺地域の歴史と文化を紹介していく。

写真／早水 勉・川口雅也

第1回 メソポタミアからギリシアへ 現代星座のルーツをたどる

パルテノン神殿は、アテネ市内の中心部にあるアテナ女神を祀っていた神殿で、紀元前5世紀に古代ギリシアの巨匠フェイディアスが建築したとされる。世界遺産。

水先案内人 早水 勉 (薩摩川内市せんだい宇宙館)
はやみず・つとむ
星食観測・研究をライフワークとして活動し、日本天文学会天文功労賞、国際表彰「ホーマー・ダボール賞」を受賞。古代ギリシアを中心とする天文学史にも造詣が深い。

古代の天文学と神話

天文学は、歴史上もっとも早くから発達した科学と言えます。それは、生活のため、中でも農耕のために暦を開発し、交易のために方角を知る必要から生じたものです。現代の星座のルーツは、その主要なものは古代メソポタミアにあり、続いて古代ギリシアに引き継がれて大きく発展しました。その過程で、古代ギリシア地域に伝承されてきた神話が星座と結びつき、壮大な文化を形成していきました。

このため古代の天文学は、神話や美術に彩られ人間味にあふれた魅力が満載です。この連載では、近年の新しい知見や、日本であまり知られていない天文学と神話

に関する話題を紹介し、現代の天文文化とのかかわりを考えていきます。

古代オリエント天文学の黎明

古代オリエントは、古代ギリシア・ローマから東方に当たる、古代エジプト、古代メソポタミアを含む広い地域です。古代オリエントに、黄河文明（中国）、インダス文明（インド・パキスタン）と並んで四大河文明と称されるふたつの文明が人類史上初めて誕生したことは、世界史で最初に学びます※注1。古代オリエント地域はヨーロッパと地理的に近く、古代ギリシア・ローマにとってさまざまな文化を持った先進地域でした。

古代エジプトも古代メソポタミアも独自の

天文学を発展させましたが、エジプトでは、日月食、彗星や惑星の天象に関する記録などがほとんど残されていません。一方、メソポタミアでは、エジプトとは異なり、日月食の記録から、彗星の出現記録、惑星の運行記録などが多数残されています。メソポタミアでは占星術も古い時代から行われていましたし、後述するように、現代に通じる主要な星座の発祥も古代メソポタミアが起源となっています。

古代メソポタミアは、エジプトと異なりいくつもの民族が入れ替わりながら支配を繰り返した歴史があります。この地域を「バビロニア」と呼ぶこともありますが、狭義にはバビロニアはある時期にメソポタミアで栄えた国家のことです。なお、メソポタミアとは「河の間の地域」を意味しています。



古代エジプトの木棺。最上部には翼を広げた太陽（有翼日輪）が描かれている。これは皆既日食のコロナを表していると考えられている。

古代エジプトの天空と太陽の神ホルスの青銅像。オシリス神と女神イシスの子で、ハヤブサの姿で象徴される。ファラオたちは「生けるホルス」とされる王権のシンボル。（ともにアテネ国立考古学博物館所蔵）



シリアにあるパルミラは砂漠に咲いた華と称される美しい遺跡。2015年イスラム過激派組織ISにより遺跡の貴重なエリアが破壊された。写真は1993年のもの。

（写真：Marina Milella / DecArch）

※注1

近年の研究で、中国の揚子江流域でも紀元前7000年頃には稲作が始まっており、文明が発祥したことがわかってきています。

メソポタミアの古代都市ウルから出土した空洞の箱。両面に貝、赤色石灰岩、ラピスラズリがモザイク状にはめ込まれて、戦時と平和な時代の情景が描かれている。（大英博物館所蔵）



古代オリエントをもっと知りたい

日本国内で古代オリエントに関する展示を見られる施設としては、東京池袋・サンシャインシティの「古代オリエント博物館」があります。筆者が訪問したのは2年ほど前になります。当時イラク・シリアを拠点にテロ活動を行っていたイスラム過激派IS（イスラミックステート）が、シリアのパルミラ遺跡を破壊してしまいました。同博物館では、このパルミラの遺跡のパノラマ展示に「現在ではISにより破壊されてしまいました。このような暴挙に抗議します」と記されていたことを覚えています（このままの文言ではありませんが）。同施設では独自に多くの学術書を出版しており、オリエントについて日本語で読める貴重な資料となっています。



現代につながる星座のルーツ

現代に通じる星座の起源がメソポタミア文明にあることは、間違いのないところですが、そして、多くの書物やプラネタリウムで、「この地域のカルデア人の羊飼いたちの星座がルーツ」という解説がなされています。しかし、この「カルデアの羊飼いの説」は修正される必要があります。

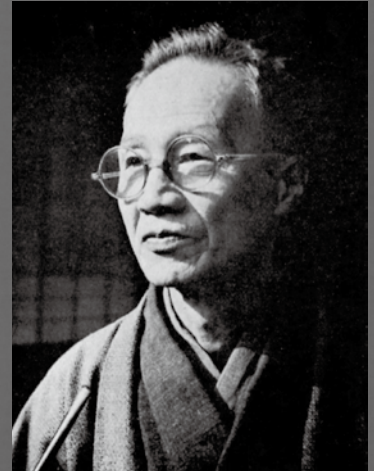
野尻抱影氏（1885～1977年）は、昭和初期から中期に活躍した、当時の日本で最も著名な天文家のひとりです。若いころは、旧制中学校の英語教師として教鞭をとるかたわら、英文書籍の翻訳に取り組んでいます。氏の偉大な功績は、国内外の星の名前や星座の由来を綿密に調査し、それら伝承や神話を多数の著作物として世に送り出したことでしょうか。特に、同時期の天文学者山本一清氏と盟友関係にあり、山本氏の設立した東亜天文学会を舞台に多くの有益な議論を巻き起こしました。

これらの優れた著作物は他の追随を許さず、没後40年を経過した現在でも、重要な天文民俗学の資料として輝いています。現在私たちが親しんでいる星々の国内外の伝承や神話には、野尻氏の影響が強く残されています。

しかしながら、野尻氏のような巨匠といえども、学問としての裏付けには他からの批判が必要です。野尻氏の著作物においては、特に海外の引用に対して出典を記されていないことが多く、検証を難しくしています。以下に記す「現代星座の起源」についても、近年の検証から見直しが必要です。

野尻氏は、『星の神話・伝説集成』の中で次のように記しています。

『バビロニアに、こういう天文の知識を伝えたのは、紀元前三千年頃、東の山岳地方からメソポタミアへ侵入して、そこに建国したカルデア人であった。彼らは牧羊の民族だったので、夜通し羊の番をする間に星をながめた。それで星のことを「天の羊」、



野尻抱影氏。昭和初期から中期に星に関する伝承や神話に関する多数の書籍を執筆した。作家の大佛次郎は実弟。

ギリシャでは紀元前の風が今なお吹きわたる

「アクロポリス」は、古代ギリシアの都市国家で、宗教的、政治的に中核となる小高い丘を指す。ギリシア各地に多数存在するが、アテネのアクロポリス（写真）が最も有名。（撮影／川口雅也）





古代オリエント地域図

ローマから見て東方の地域を「オリエント」と呼んでいた。古代ローマ以前から文明の発達していた地域への敬意で、オリエントとは「日出の方向」を意味している。





女神アフロディーテに戯れる牧羊パーン。ヤギの角とひつめを持ち、羊飼いの神とされている。(アテネ考古学博物館所蔵)

(右上) 新アッシリア時代の紀元前687年に記された「ムル・アピン」と呼ばれる粘土文書。惑星を含む71個の星と、現代に通じるいくつかの星座の原型が記されている。(大英博物館所蔵)

(右下) クドゥルと呼ばれる、メソポタミアで土地の境界を定めるために作られた石碑。写真は紀元前10世紀に造られたもので、メソポタミアの星座の起源を示すものとして、特に引用されることが多い。最上部には左から金星、月、太陽、最下部にはサソリ、その上には弓を引くサソリの姿をした神が見られる。この弓を引くサソリは、後の星座の原型と考えられている。(大英博物館所蔵)



作があります。氏の著書のひとつ『星座の紹介 (Introducing the constellations)』は、当時の天文啓蒙書として世界的に影響があり、1937年の初版から1953年まで、最新の研究を取り入れながら7版にわたり改版されています。この書籍によると、『現在に通じる星座の成立は、紀元前三千年頃、チグリス・ユーフラテスや周辺の地域に住む、羊飼い、砂漠の遊牧民、海人、学者らにより作られていった。』とあり、羊飼いに限定していません。紀元前三千年頃、メソポタミアに住んでいたのは、セム系民族のシュメール人やアッカド人です。ブリタニカ国際百科事典によると、『彼らは恒星全体を「天の羊群」と呼び、太陽は「老いた羊」、七つの惑星^{※注2}は「老いた星」であり、星にはみなある「羊飼い」がついていると考えていた。』とされており、これにも「羊飼いが作った」とはされていません。「羊飼い」は、あくまで星空にあるものだったのです。おそらくは、野尻氏はこれらを誤解した可能性があると思われます。

※注2…当時は、太陽と月も惑星と考えていました。これに水星、金星、火星、木星、土星を加えた七星を惑星としていました。しかし、この記事では直前に太陽について記されていますので、「六つの惑星」の誤りと思われる。

そしてギリシアへ

エジプトやメソポタミアで発展した文化は、やがてギリシアに引き継がれ、さらに独自の文化に発展していきます。エジプトやメソポタミアの国々は、諸外国から戦役に備えた労働力、つまり傭兵を多数雇っていました。それら多くの傭兵の出身地がギリシア地域であり、彼らは戦役を終えると再び故郷に戻り、エジプトやメソポタミアの文化を輸入していきました。

一口に古代ギリシアといっても、これも非常に長い歴史があります。最初に起こったのは、地中海に浮かぶクレタ島における「ミノア文明」です。この文明が栄えたのは紀元前3300年頃からで約2千年も続きました。この文明の遺跡としてもっとも有名なものはクノッソス宮殿で、ギリシア神話に登場する怪物ミノタウロスを閉じ込めた迷宮

惑星を「年寄りの羊たち」と呼んでいた。』

他の著作にも同様に星座の起源を「カルデア時代にある」と紹介しています。

このことは、現代に通ずる星座の起源としての注目すべき記述ですから、野尻氏以降の書籍やプラネタリウムでもこぞって紹介することになったのでしょう。例えば、学研の図鑑ニューワイド『星・星座』には、星座の歴史として、次のように記されています。

『今から5000年もの昔、チグリス・ユーフラテスの両大河に挟まれたメソポタミア地方で、羊の群れを追って生活していた、古代カルデアの人々がいました。彼らは一晩中星々をながめ、めぼしい星のならびを

動物や人間の姿に見立てて星座のすがたを作り出しました。』

しかし、現代の西洋の図書を調べても、「カルデア人の羊飼いが星座を作った」との記述はなかなか見当たりません。これはどうしてでしょうか？

そもそも、カルデア人がメソポタミアの碑文の中に初めて登場するのはようやく紀元前9世紀頃で、新バビロニア王国を建国したのは紀元前625年です。これは古代メソポタミアの末期ですので、二千年以上も時代が異なります。

Robert Horace Baker (1883 ~ 1964年、米) は、イリノイ大学天文台の研究者であり、天文学と天文学の入門書の多数の著



古代オリエント年表

	古代メソポタミア	古代エジプト	古代ギリシア
西暦紀元	アルサケス朝		
	パルティア	ローマ帝国	
	セレウコス朝シリア	プトレマイオス朝	
	アレクサンダー大王による東征・古代マケドニア アケメネス朝ペルシア		ヘレニズム期
紀元前1000年	新バビロニア(カルデア人)		クラシック期
	アッシリア		アルカイック期
		末期王国	暗黒期
	カッシート	新王国	ミケーネ文明
紀元前3000年	古バビロニア	中王国	ミノア文明
	アッカド・新シュメール	古王国	
	初期王朝	初期王国朝	
	ウルク文化	先王朝文化	
紀元前6000年	ウバイド文化	農耕・牧畜文化	
	ハラフ文化		
	農耕・牧畜文化		

古代オリエントの世界 (古代オリエント博物館 編) より一部改変



ミノタウロスは、ギリシア神話に登場する、頭が牛で体が人間の怪物。クレタ島では牛が重要な家畜で、牛をモデルとした絵画や彫刻が多数出土している。この像は、古代ギリシア紀元前5世紀の巨匠ミュロンによるもの。(アテネ国立考古博物館所蔵)

(ラビリンス)のモデルだと考えられています。伝承では、この物語のヒロイン王女アリアドネに酒神デュオニソスがプレゼントした冠が、天に上げられてかんむり座になりました。また、迷宮の建設者ダイダロスとその息子イカロスの逸話もよく知られています。親子は、ダイダロスが発明した羽をつけて空を飛びましたが、イカロスは喜ぶあまりに高く飛び過ぎて、太陽に近づきすぎたために羽を接着していた蠟が溶けて、海に墜落してしまう話です。読者も、どこかで聞いたことがあるでしょう。ちなみに、イカロスの墜落した海が、今日のイーカリアー海(エーゲ海の南東部)となったとか。ミノア文明は紀元前1400年頃に突然途

迷宮と黄金は多くの人を惹きつけ惑わせた

シュリーマンによって発見されたミケーネは神話の英雄ヘルセウス建国と伝えられる。遺跡入り口にある獅子の門は巨石を積み上げて建造されており、これは、ヘルセウスがひとつ目の巨人キュプロクスに命じて作ったとされている。



ミケーネ遺跡から出土した黄金のデスマスク。「アガメムノンのマスク」と呼ばれているが、その後の調査により、トロヤ戦争の時代よりさらに古い、青銅器時代の遺品であることがわかった。(アテネ国立考古博物館所蔵)



絶えます。ミノア文明には「線形A文字」と呼ばれる文字がありますが、未だに解読されていないため、その歴史はミステリーに包まれています※注3。

ギリシア本土でも紀元前1600年頃ペロポネソス半島に別の文明「ミケーネ文明」が起り、いわゆる古代ギリシア文明の直接の起源となります。この文明で使用されていた線形B文字は既に解読されています。

現在ギリシャに行くと、昨今の報道の通り経済危機のさなかにあり、EUにおいては残念ながら他国から援助されなければ存続できない状況です。失業率は20%にも上り、「職は見つかりましたか?」が、近年の時候の挨拶だといえます。特に若い人ほど失業率が高く、優秀な若者の多くが外国に就職してしまうそうです。一方で、ヨーロッパ地域におけるギリシャの存在は、

優れた古代ギリシア文明を育んだ歴史をリスペクトされています。ヨーロッパの文化は古代ギリシアがルーツと考えているからです。現地のギリシャ人たちも、もちろんその歴史に誇りを持っていて、古代ギリシアのソフィストたちのように、会話の入り口には機転の利いたジョークを入れることが習慣となっているそうです。しばらく、無駄とも思える軽妙な議論をしてから本題に入るのが、粋なギリシャ人なのです。

※注3…ミノア文明の終焉は、大津波による説、ミケーネ文明に滅ぼされた説などがありますが、現在では後者が有力とされています。

独特の地理と歴史が生んだ 古代ギリシア文化

ところで、現在のギリシャ人は古代ギリシア人の「末裔ではない」ことをご存知で

しょうか? 日本人は世界的にも極めて長い国家の歴史を持っているため、つい見落としてしまいがちですが、ヨーロッパ、とくにバルカン半島の国々は有史以来なんども他国の侵略を受け、そのたびに支配階級の血筋も途絶えているのです。現在のギリシャは正式な国名は「ギリシャ共和国」で1822年に独立した国家です。つまりは現地のギリシャ人にとって、直接の末裔ではないから、くすぐったく感じつつも古代ギリシアを誇りにしている、というのが近いところでしょう。

前述のように、古代ギリシアは単一の国家ではなく、アテネ、スパルタ、テーバイ等のポリスと呼ばれる都市国家の集合体でした。彼らは頻繁に他の都市と戦争していましたが、ペルシャのような他地域からの侵略に対しては、連携してギリシア地域

現代につながる平和の祭典・オリンピック

よく知られているように、近代オリンピックは、古代ギリシアの都市オリンピアで4年に一度行われていた競技会をモデルとしています。古代ギリシアにはいくつもの競技会がありましたが、最も格が高かったのは、オリンピアのゼウス神域で行われていた、いわゆる「古代オリンピック」でした。すなわち、「オリンピック」は「オリンピア的な」を意味します。古代オリンピックは、紀元前8世紀から古代ローマ時代の紀元4世紀まで、なんと1000年以上もオリンピアで開催され続けました。古代オリンピックの起源は、神話上の英雄ペロプスまたはヘルクレスという伝承があります。初期の競技は短距離走だけでしたが、時代が下ると、長距離走、五種競技(短距離走、円盤投げ、やり投げ、走り幅跳び、レスリング)、拳闘、戦車競走などが行われるようになりました。

古代オリンピックの参加資格に貧富の差はなく、ギリシア人の男性(奴隷、犯罪者は除く)であれば誰でも参加できました。競技会の開催に先立って、オリンピアからの使者がギリシア諸国を回って休戦を告げ、競技会が平和裏に開催されるようギリシア全土が協力したのです。ゼウス神前での競技はフェアプレーを尊び不正は罰せられました。各競技の優勝者は、名前と出身地が発表され、葉冠が与えられました。現代に伝わる勝者のシンボル「月桂冠」は、太陽神アポロンの聖域デルフィーの競技会で与えられたものです。つまり神のもとに「栄誉」のみを競ったのです。近代オリンピックの祖、クーベルタン男爵がモデルとしたのは、まさにこのような古代オリンピックの精神で、「参加することに意義がある」の言葉に象徴されています。



アテネ国立考古学博物館所蔵



アテネ国立考古学博物館所蔵

アテネ・ケラメイコス遺跡から出土した紀元前510年頃の墓石の台座。中央にはレスリングをする様子が刻まれている。台座の上には、競技者の大理石像(クーロス)が立っていた。



オリンピア考古博物館所蔵

(左) デルフィーの神殿に刻まれた月桂冠。アポロンが愛したニンフ・ダフネ(月桂樹の意)に由来する。(右) 黄金で作られた月桂冠。

オリンピアのゼウス神殿から発掘された破風彫刻。左から、オイノマス王、ゼウス、ペロプス。ペロプスは、オイノマス王の王女ヒッポダメイアと結婚するために、オイノマス王と戦車競走を行った。これが古代オリンピックの発祥由来とする伝承がある。



を守りました。古代ギリシア時代の最盛期（紀元前5世紀頃）には、大小200もの国家がありました。これは、ギリシャには山地が多く平野が少ないことが理由のひとつとされています。このことが、ポリス間の競争を生み、血筋や武力ではなく優れた人材を登用し、自由な発想を促す原動力となったと考えられています。

■参考文献

- 『ニューワイド図鑑 星・星座』（学研）
- 『古代オリエントの世界』（古代オリエント博物館研究員）
- 『古代ギリシャのリアル』（藤村シン）
- 『星座の神話』（原恵）
- 『星の神話・伝説集成』（野尻抱影）
- 『星座神話の起源 古代メソポタミアの星座』（近藤二郎）
- 『星座神話の起源 古代エジプト・ナイルの星座』（近藤二郎）
- 『ブリタニカ国際百科事典』
- 『Introducing the Constellations』（Robert.H.Baker）
- 『Star Names - Their Lore and Meaning』（Richard Hincley Allen）
- 『The Trustees of the British Museum』（大英博物館）
- 『The New Acropolis Museum』（アクロポリス博物館）
- 『Treasures of Ancient Greece』（特別展古代ギリシア図録）
- 『The ancient Olympic games』（大英博物館）

街並みに映える青と白は独立のシンボル



ギリシャでは至る所にギリシャ国旗が掲げられている。何度も侵略された歴史から、独立国としてのシンボルを主張する意識の表れだ。



アテネ国立考古学博物館

古代ギリシアの歴史遺産を集めた世界有数の博物館。エーゲ海ミノア文明からヘレニズム期の美術品が極めて充実している。古代ギリシア文化に触れるには、パルテノン神殿と併せて必見。入り口に壮麗なイオニア式の柱が並ぶ重厚な建物だ。



戦闘画が描かれた古代ギリシアの取手付き壺（アンフォラ）。ワインや穀物の運搬・保存に使われていた。



多数の古代大理石彫刻や青銅像が展示されている。写真は青銅のゼウス神（ポセイドン神との説も）。



新アクロポリス博物館

2009年、アテネのパルテノン神殿のあるアクロポリス丘のふもとに建設された。内部はパルテノン神殿を模した設計となっている。収蔵品もその多くがパルテノン神殿周辺から出土したもの。なぜか、写真を撮ってもよいエリアと拒否されるエリアがあった。



新アクロポリス博物館にある最も重要な展示物のひとつ「キャリアティード」（女像柱）。パルテノン神殿に隣接するエレクトイオン神殿のテラスを支えていた。本来6体の女像柱があったが、1体は1803年に英国のルジェリが切り取って本国に持ち帰ってしまい、現在は大英博物館に展示されている。新アクロポリス博物館では残りの5体をオリジナルの隊列のまま移設して展示し、持ち去られた1体の位置は意識的に空けてあるが、これは英国に対する抗議の意思が込められている。なお、屋外のエレクトイオン神殿には、6体のレプリカがはめ込められている。